

若いお母さんたちへ

帰国して三度目の春に

はるにれの会 塚田幸子

月日のたつのは早いもので再び春がめぐってきました。一年前に書いた自分の文章を読み返してみると、その頃ですらまだ、アメリカでの生活を十分に消化しきっていなかったのだという思いがします。今そう言えるということは、今になれば当時のことが真に過去のことになり、多少とも冷静に客観的な見方ができるようになったということでしょうか。それにしても冷たいと長い時間がかかったものです。その期間と言えば三年余、三

年の間に長女は中学三年生に、次女は小学四年生にまでなっているのですから。

その間に私自身は三十八歳、俗に言う「おばさん」の中でも相当しっかりおばさんです。ところが、自分の意識としてはむしろ長女と肩を並べる中学生からよくてせいぜい大学生なのです。ひとつにはそれが原因なのか、長女が中学生になった途端、私は母親というより先輩として口うるさく長女の言動に干渉を始め、望ましくない母親を演じていま

した。自分が記憶している自分自身の中学生時代の行動の価値基準をいちいち長女に当てはめてこうしなさい、ああしなさいと言いはじめたのです。娘にいやがられるとわかっていながらも、湧き上がってくる思いを三度に一度は押さえられなくなるということだったでしょうか。

中学生時代の私はすべてにおいて完璧主義者だったように思います。二十数年も前のことですから恐らくその間に都合の悪い所は記憶に残らず、良い所だけが残ってしまった可能性は大なのですが、始めの内はそんなことすら頭に浮かばず、長女があい変わらず小学二年生の妹と本気になってケンカをしたり、「一緒に遊んでくれない」とふくれたりするのを見て、もう中学生なのに……と思ってしまったのです。

考えてみると、私が中学生になった頃は、

一言で言ってしまうと今は時代が違うという事であり、服装の点で見てもまだまだ赤やピンクは女の色等の枠がはっきりしていた時代でした。今は逆に男の子が赤やピンクを着て、女の子は黒やグレーを好んで着る時代です。服装だけ見ても昔のような男女の別、大人と子供の別、老人と若い者の別はなくなっているのだということがよくわかります。

そういう自分自身、大学時代には、パンタロンと称して男子専科であった正式の場での女性のズボン（今ではこれもパンツ？）着用の一翼を担ってきたのです。ミニスカートの始まり、ジーンズが代表した老若男女に区別を作らないという服装の革命は、服装だけにとどまらず、あらゆる文化、社会状況同様に革新されていくことの子兆として意識されていたはずでした。その私が今になって娘にお説教や小言を言う図はどうもおかしい

のですが、それをやめることができずに一年近くがたっていたのでした。

例えば、今、女の子たちは小学校の高学年あたりから、まるで男女が逆転したように乱暴な男言葉を使い始めますが、長女の場合、帰国したのが小学五年も終わりの頃でしたので、長女のそんな言葉が私の耳に入り始めたのがちょうど中学生になった頃からでした。女の子だから(男の子だから)こうすべき(すべきでない)という男女の規範の違いを、私たち両親はできる限り排除してきたつもりでしたけれど、聞いていて不愉快になるという事実の前に、大人になったらそれでは通らないという理由等を並べたてて、「……しろ」だの「てめえ」だのと言わないように度々、敵しい口調で叱りつけたものです。それはまた、姉が妹に対して使っている場面でしたから、妹への影響を考えると余計神経質になら

ざるを得ないのでした。

こういうことは日常の生活の中で突然起こってきて、深く考える暇もないままに対応せざるを得ないわけですが、そんな時にうろたえて感情的になってしまつては、自分自身が脱し切っていない古い価値観が頭をもたげてきて、とっさのことに口をついて出るので、一度や二度でなく、何度となくくりかえされた親子のやりとりで、長女に対して私は用心深く「女の子なのだから」とか「女の子のくせに」等の言葉は使わないように心がけていましたが、これまでのところは何とか切りぬけてきています。

そこで一息入れて考えてみると、親が心配するほどに、娘たちは脱線してはいないというのが本当のところでしょう。多分彼女たちも一種の流行のように男言葉を使つてきているのでしょう。一生使い続けていくと考える

方がむしろおかしいですし、一日中そんな言葉を使っているのでもありませんから。ちょうど自分たちが何となく流行にのってしてきたように、古い、そして合理的でない価値観への、ささやかではあるけれども結果として大きなうねりとなる若い世代からのチャレンジとみて、深刻に考え過ぎないようにするというのが答でしょうか。それにしても若い人たちからチャレンジされるほどに古くなってしまう自分たちのことを思い、啞然となります。

こうして今回は、中学生の母親としてのテーマを敢えて記すことになりましたが、それについては、私自身迷わずにいられず、その迷いがペンを取るのを遅らせてしまいました。というのも、「幼児の教育」という本誌のタイトルにどうしてもこだわらざるを得ない自分自身がいて、「はるにれ」のメンバー

からは励まされても、まだ一歩踏み切れない心境が続いていたからです。幼児もいずれば成長し、遠からず似たような体験をすることになるお母さんたちに宛てて書くのだと自分に言い聞かせてもこだわり続けていたわけです。次女について書ければ、ほんの一歩先というところで、私自身納得がいったのでしょうか、何につけても初めてのことはいつも私の中で最も大きな比重を占めるので、ためておいた分、今は中学生の長女への傾きが大きいのです。

長女は今、区立中学校へ通っており、来春には高校受験が待ち構えています。初めての受験ということで、当人よりも私の方が不安だったのです。両親が共に公立校一本だったため、単純に都立の普通科を考えていたのですが、長女の友だちの何人かは中学からすでに私立へ行っており、その人たちの話を聞く

とそういう道も悪くはないかと考えてしまうのです。今までの選択も絶対とは言えず、これからのことも確信はありません。当人が不満をもらすわけでもなく、特別の希望を言うわけでもないで、大幅な方針転換はないでしょうが、この先も私はいろいろ考え、迷いそうです。

今では過去となったデンバー時代も、子どもの学校を選んでから居住地を決める（あるいは替える）という日本人が多い中で、それをせずに通したのでした。前にも書いたように、デンバー市内に住むと、黒人等の多く住む街区と白人の多い街区（学区）の間で相方のパブリックスクールの半数ずつの児童・生徒をバスで、対になった相手先の学校へ連れて行き、一校の白人と黒人その他の混成比が人口比に近くなるように無理にでももっていかうとする強制バス通学制度があり、一方、

市外の郡（カウンティ）にはこの制度が適用されないので、強制バス通学による学力低下を嫌って、経済的に豊かな白人はデンバー市外へと移り住んでいくという動きが起り、法律が意図していたような構成はますます崩れていっているのです。市内に残された生徒は、経済的にも貧しく、読み書きどころか、英語を話すことすらできない者もいて、その平均的な学力は低下する一方です。この悪循環の中で、引越しができない人々は数少ない一貫教育校に早くから申し込んだり、私立を選ぶという以外に方法はありません。

我が家では、アメリカに三年ほどしかいないということがあらかじめわかっていましたし、全く英語が話せないという点では、長女はインディアンやベトナム難民の子どもと同様、平均学力を下げる方のむしろ加害者であったわけですから、引越しもせず、私立をあ

たることも家庭教師をつけることもせず、黒人の多いパブリックに通わせ続け、結果としてはその中で最優秀生徒というごほうびを頂くまでになったのでした。三年という短い年月を思えば、学力レベルが低いと言われる学校内であっても、これは感激的なことでした。

帰国してからの長女は、デンバーでの苦しい努力の毎日の疲れを癒そうとしているかのようになり、その後の三年をのんびり楽しく過ごしてきたようです。帰国直後に有無を言わずに塾に行かせるということも、他家の多くの例のようにあるいはできたかもしれませんが、私にはそれはできません。人生が長い目で見れば、張りつめた後に緩む時期も必要でしょうし、友人を競争相手としか見ない、単一の価値観が支配する場に追いやることには抵抗があるからです。私自身は中学時代に最大最善の努力をして、当時充分報われ

たように思ったものの、その後が続く高校時代は反動としての挫折であり、今に至るまで苦渋の根源であり続けたという事実を前にして、長女の進む道に私が勝手にルールを敷いてしまうということはできないと思ったのです。

過去をふりかえると、楽しかった、しあわせだったと思えることがあり、現在まで引きずり続けている苦しみや痛みがあります。折につけ、何度もたしかえてその意味を新たに問いなおす必要があるような重い体験が、誰にでもひとつやふたつあるのではないのでしょうか。そうしてみると人の歩んで行く道はどうもまっしぐらの直線ではなく、曲がりくねっているような気がします。短期的にみると一直線に見えることがあっても、それはもっと大きな曲線の一部だったと後になって気付くように、時には前方への目標を見失うこ

ともあるのです。別れ道で選び取らなかつた方の道に再びもどることはできないわけですが、道は意外にもらせん階段のように、似たような重要な岐路に何度もさしかかるらしく、そんな時ふと、過去の体験が蘇えって新たな選択の助けになったり、逆に妨げになったりします。

長女が中学生になつてから、私は長女と自分を独立した人格としてみるのが困難になつていたように思います。背丈では私をとうに追い越しながら、背中を丸めてごはんを食べたりする長女を見ると、自分は中学生の頃には意識的に姿勢を正しくしようと努めたものだった等と長女のすることなすことが目障り、耳障りでつい口やかましくなつてしまつたのでした。こうして学業成績にも交友関係にも敵しい見方が始まつたのです。

長女がまだ小学生だった内は、私はそんな

に感情的にならずにいられたのに、急に変わったのは自分でもびっくりするほどでした。私には長女の方が突然変わったのではないといふことが自分でわかつていましたから、原因（もんだい）は娘にはなく私自身にあるのだということも内心ではわかつていましたが、かと言って湧き起こってくる感情を自分ではコントロールすることができないのでした。

こうしてみると、満足してははずの自らの中学時代という記憶もずいぶん危うげなものだったかもしれせん。自分では最も輝かしく明るい時代と信じて疑ふことすらなかつた当時のことの中にも、今、改めて娘という鏡に照らしてみると、今では少しも得意になれないと思えることや、考えが足りなかつたと思われることがいくつも出てくるのです。それは私が当時を回想して語つたことに對し

て娘の口から直接の批評として言われたこともあれば、語る内に気づかされたこともあり、その瞬間、私は中学生当時にタイムスリップしたような気がして、娘の方が私よりはるかに頼もしく見えたものです。

逆にまたまっ暗にしか思えなかつた高校時代というのも、そうしてみると光の部分を持つており、正当な評価を持っているのかもしれないという気になってきました。けれど、こちらはまだ少し時間がかかりそうです。

初めての赤ちゃんとして、生まれたばかりの長女を抱いた時、私は嬉しさよりも、その生命を丸ごと守り育てていかなければならないという責任のあまりの重さに圧倒され、半ばたじろいでしまったことを忘れることができません。かわいいと思えるゆとりは、その後三、四ヵ月もたつて後、母乳だけでここまで育てたという実績に支えられてやっと、こ

の子にとってかけがえのない母親になれたという思いがしてから生じてきたのです。誰にでも子どもを育てることはできるのだから、誰でもがこの子の母親になり得るけれど、それゆえにこそ、自分の産んだ子が、自分をかけがえのない唯一無二の母親として認めてくれることを私は切望したのでした。それは理性的に考えて望んだというのではなく、出産の半月前から同居し始めた夫の両親の初孫への期待を目の当たりにしてからムクムクと湧いてきた我が子への動物的な執着、独占欲とでもいうものから発していたように思います。この執着はひょっとして今なお続いているのかもしれない。

良い母、立派な母にならなくてはという気負いは、次女の出産と共にかなり消失したものの、初めての事に際して等、時々顔を出すものようです。一方、気負いを捨てて、自

分の気持ちのおもむくままに育ててきた次女ですが、その三歳から六歳までの三年間を自由の国アメリカで過ごしたことは、私にとってその意味を深めるできごとでした。

堂々と人前で、愛する者同士が抱き合い、口づけするという社会で、私は、長女の時には思い切ってしまうことのできなかったキスや抱擁を次女に対してはてらいもなくしてみることができ、そうすることが、どんなに自分にとって心地よいことか、身をもって味わうことができたのです。それまでの日本人としての行動様式を捨てて、アメリカ人のようにふるまっても、当人も周囲も奇異に感じないで、むしろ自然に受けとめられるのは次女の年齢が大きく影響していました。長女はすでに日本人としてのアイデンティティーを確立していて、私は夫に対するのと同様、長女に接する態度を大きく変えることはできません

でした。

けれども長女は、私と次女の接する様子を目の前に見ています。人がその心を表わす手段として多様なものを持っているということや、新たな手段を獲得することもできるということを長女もたくさん学んだはずですが、最も重要な手段である言葉を失って、苦しんだ体験は、私の想像以上に、長女にとって重いものだったようで、つい先日作文にも書いてあったくらいです。

いつの日か、苦しかった体験に、相当の意味を与えられるようになることを、自身の体験と共に、長女の体験についても祈りたいと思うこの頃です。